

川上宏奨学基金報告書

論文題目「被災と報道：ケアのジャーナリズムの視点から」

2017年度川上宏奨学基金を頂き、卒業論文「被災と報道：ケアのジャーナリズムの視点から」を無事執筆することができた。以下に、論文の内容、具体的な調査内容を報告する。

1. 卒業論文の要旨

本論文では、福島県南相馬市小高区を舞台に、東日本大震災以降、被災者がメディアにどのような印象を抱いているのか。そして、東京目線で行われる震災報道の現状を踏まえて、被災者の必要とする報道はどのようなものなのか、その報道の達成には何が必要なのかということ問いに掲げた。

第1章では、第1節で小高区に関する『朝日新聞』の6年間の記事数の推移をまとめ、KH Coderで年ごとの記事内容の分析を進めた。この分析では、2011年の震災直後から4年間は記事数が減少し、原発事故による避難指示解除の動きがみえてきた2015年以降2年間で再び記事数が増加していったことがわかった。第2節で、小高区住民の小林さんと久米さんが取材された2015年以降の記事を『朝日』『読売』『福島民報』の3紙を対象に内容ごとに分析。1人の取材対象者に対しても、読み取られる被災地の状況や被災者の思いは記事によって異なることがわかった。第3節では実際に小林さんと久米さんにインタビュー調査を行い、取材を受けて感じたメディアへの不信感を聞くことができた。

第2章では、2017年4月に再開した小高区4小学校を調査対象とした。第1節では、小高区4小学校が小高区での運営を再開するまでのあゆみや、現在の児童数などの学校状況についてまとめた。第2節では、高木教頭（仮名）にインタビュー調査を行い、学校再開時のメディア取材について話を聞き、学校繁栄のためにメディアを上手く利用しようとする学校側の考えを聞くことができた。

第3章では、林香里の「〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズムーケアの倫理とともに」を参考に、第1節では正義の倫理を備える客観的ジャーナリズムとケアの倫理を備えるケアのジャーナリズムを比較した。第2節では、3人のインタビュー内容と2つのジャーナリズム精神を照らし合わせ、被災者が必要とするジャーナリズムとは何かを検討し、被災者はケアのジャーナリズムを求めていることが分かった。

問いに対する結論として、被災者はメディアを、自分たちの現状や声を都合よく切り取り、発信する他者として捉えていることがわかった。インタビュー調査では、自分たちの声をそのまま発信してくれない、という声を多く聞いた。また、被災者の求める震災報道とは、被災者の感じる痛みや喜びを共に感じ、発信し、被災者に何かを与える・返す報道

だと考える。こうしたケアのジャーナリズムをもつ震災報道の達成には、被災者と記者が相互に情報や思いを共有して、それを発信することが必要だと、筆者は考えた。

2. 卒業論文を書き終えて

新聞記事の内容分析や福島県でのフィールド調査は、地方ジャーナリズムのあり方と真に向き合う研究となり、マスコミュニケーション学科での4年間の学びの集大成となる論文を書き上げることができたと感じている。また、本論文の調査、執筆にあたり、自分が春から記者としてどうあるべきなのか深く考えることができた。記者である前にひとりの人間として、困窮する人々の思いを忘れることなく、自分の足とペンで社会の課題に真摯に向き合っていきたいと思う。

3. 奨学金の主な用途

- ・交通費（神奈川～福島）
- ・文献費（G-Search データベース）

4. 最後に

本論文執筆にあたり、ご支援いただきました、故川上宏先生とご家族の皆様、ご指導くださった森暢平先生に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。